字津見衣

續編

中

宇都良衣 續編中

續交前堂 住柳町

所の名によりて遍昭さんちやせんのことを思ひよりてその
こと書て綴りし時も今春の末なれハ東坡か亭に名
つけし前蹤にも似たるむかしはやを一句にいそく

さく花や交てよしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町にさとの町にぬ医師ありニ年に二度名
きかふるよりの為のめでし書を帰て作の學へるの
喩にして毋もぬハりしの毋にぬや夜話亭ありし

七里園

二度の撰集ありて頌号ハ同一朗詠なりうの医
師をつとめて号をあらぬよく世のくのもてはやすをと
賀すべし

為或人書序

五十にして親を慕ふハ世にあるよりまさるめしとハ昔
大賢ものゝ〻ひ〻七十にして慕の人今多陽乃
箕山巣父ハ此秋先考の五十回の忌日に佛ゑ孔子の
いとなゝハさゝや其生ゑ為すゝそゝて世方の
能士ゑ向かうをりゝむされハ心の水の清ゝぬより
うけうゝぬ人まゝもよせみくりゑなきゝよも
さこゝをあゝこゝうゝ考ゝうゝ白のあり

為或人書序

ゝゝ涙よ人を動ゝゝといつゝゝるりゑハあゝさりゝりゝゝこうの
先人烈志子ハ負享元禄の比よりて其角宗雪ゝ曹と
友ゝて深く心推ゑ拾ゝりゝと其世の涙白ハ古集ゑも
つゝゝゝゝゝ其子うまゝこまゝてもゝ形凡月の才ゑ富ゝてゝめ
はゝ世ゑ多ゝゝむや昔曾子ゝ羊棗を食ゝゝゝハ父の偉
ゝゝをわすれされハや今此箕山子の俳諧を称ゝも又
父の偉ゝを慕ハやゝゝれ孝よりして捨号ハ孝より
ゝすゝを捨ゝと捨めゝと志ゝ事ゝゝ追慕孝情の重さ
を世行ゝ只詠ゝねゝつり待ゝて拠竹のゝゝゝ及ゝゝ
めゝゝゝ拠竹行のゝゝのまむ孝子の追福ゝ冥冥ハゝゝ
為ゝゝゝ

新古菴記

數寄者ありて其閑居に名つけむことを予に請ふ請くは辞し辞られは請ふ請ふを辞らると繰かへしつゐに辞しまかりて止ことをえされは予か辞るは茶道に疎けれはやちからされとも是を思ふにけそえも古式ありて一事一器も矩をはつさしとなせは放埒の詩ありわり茶杓のおつくりにさへもちさなすそひての舞曲なかねはさして上よめくしめもわかれしちかれは古きニの舞して何の面白きことかあらむそれを面白きは其故あり同しきのかりきさのふの古きをゝふすれはあたらしきふの新きはあるを古きとしてまつてそ具も古きを賞すれとも用ゆへきにあらし新しき物の古くなるを

天地自然のことにして古き物のあたらしくなるは人の才覚智のちからになるとやされはこそ目にみえぬ鬼神も秋を折武きもののふもかたきの更をなせは一條のつけさしに男女の中をもかへさる須臾の客あふ雷を佛茶ひくといふはさそや予か此論も偶中なるへきはあたらしの一助にてあるへしそこを天そさまらせよして新古菴の記と題して得わりぬ識は世めをのかれむためのため佛茶をもてなしといふなからし早合点の人聞てあんことは圓子のてかといふさとしされも茶人のさひとなるへし

緇武法師辞

衣を墨にそめても世を遁れさる法師ありむかしは

埒下に富る家これかれとかぞふるには指一本のあるじ
なかりし利欲に心のくらきよりも畢竟ハ無分別の
三字に家居も蔵も盧生が夢となりて蒔る種の
菜の花と咲日ハ身を揉しの袖かくされおりきて
今ハ霞る楽やとそいつわるさるよりの祖翁の
ふむ行蕉も人の何捨る論なりとて其椎の本の
陰を慕へハ妙のつかふ似るよあわてこそに一庐の
よハるわりもよすこしたハ茶に好ふ人なりわしと
なる意も恒的もよしあるさぬちかわされハ壊よりて
心ハ転じかるゝしのためにいふむ昔の数寄の者今
の俳諧其風流ハ通ひもすらん心ハ妙のつくしめや
わかるへきそれこや茶そまたすくての洞度も古ていあそと
垂るゝ中にも長月比の水仙をとゝむる雪間に妬く菜を
さかし三月の筍も孝行のさたにハあらさるへてそしりの
初物を争へハ三尺の梅秋の茄子ハ捨る日も早からむ
これらを風雅の上に思へハ年の内の梅のこゝろと郭
うきす時の貴賤なられ其余ハはしめての物を間られ
只のこる雪残る花蛍も菊も名残を慕ひぬくれ
物を四季に隣りて行く物ハちるしめとも見るハ其の
時のよ似すこしまてに僕行約の足に心の轍ハかゝる
とあれし是ハ茶人を誇るにハあらしとも其そしくのよる
所をしりて風雅の本意をまもるへしとは

岳袋庵　其考句集其子洞同か求に應て

所の伝を按ずるに金玉有錦来京を見る宋人の燕石
もわるを見くらの絢を尚るといふこと教うて
けふあるべきれハ其玉も價をかゝめてうんぬんをハ
ひとこれ父を慕ふ孝子のなをたるもかきもや
よしの春をあはさるわ〳〵くも書たのはおもきをかを
ゝてハさることをかハ見ひきりめく〳〵けい集を序
を落れて生ものの至孝問ふんていちきく其
誠を感ぜ〳〵ふむや我ら辞やゝて茗をとゝるけ
てけうくわれハや

九日宰俊先生辞

我を生むものハ父母や家を藉ゝるゝハ先生なり

僕ら人〳〵年の秋い〳〵病〳〵やけ六十ゝを家ら世のぞゝり
なわ〳〵れゝこつゝも思ひ人十左思ゝるやゝ向ひ
ていいゝゝれゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝゝいちきゝ〳〵を先生
の良剤ゝをうゝ〳〵再九死の地を出て世ハ人草木
黄〳〵落虫の音よりゝ行ゝ我ハ引ゝくて石地
さのゝ〳〵菊狂ふ〳〵ふハ病苦をくるをふれハ
ゝゝ〳〵ゝものゝ〳〵けい翁を捨ひゝるものゝをく
翁ひのゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ例の
一癖ハ止すゝゝゝふ和ゝゝゝふの欲を先生を苦
ゝゝゝ

菊のゝやまつ初立の東離まて

三十撓三ツ

只年〳〵の上をおもふまもあるハなきさ亜さハ数そふ歌くハ
老の常うゝを人〳〵年いうゝ春うれハうゝまて古さ
友を生ふふむ睦月も若世菜つむ比有為子世をうゝめ
十くゝわるゝふてなるゝ身や初暦
と袖の涙もうゝめる其世ハ今り百枳身まうゝめ
うれハゆゝ世を捨人ゝゝる行菴も仏ひうゝ行をうゝ
なれハ明ゝうゝふひ〳〵を立登る世常の徑もうゝ
うゝたうひふハ行思い出ふ〳〵も多〳〵

摘菜〳〵友を其聖の徑〳〵ふ
見うゝる〳〵つゝふ遊うゝを〳〵ふ〳〵の初春世ゝる石
戸をゝ〳〵せうゝる〳〵嗚呼人〳〵年ハいうゝる春うれハうゝまて

古き友を生ふふむ
なゝ行うゝる指をゝる蒙うゝる寒〳〵

示行菴法

〳〵ゝ行〳〵法師の妻もち奥尾をゝ行ゝふ〳〵れと
只世を道れ風雅ゝ行ふゝの砌花撰ゝ似〳〵ふ心〳〵巻
ゝ世をゝ書行わゝやゝ人〳〵世ゝゝぬ身をゝ
ゝゝふ人もいゝ〳〵ゝ

示先以辞

横須賀の先以ハ捕を結を以て巻〳〵行舊門の
風雅ゝ聖ゝ行ハ世渡りの徑ゝふも〳〵ハ白上の月行

よねふ知多の浦浜くらしも亭を呼ばれにさめず
風雅をは家業と好くもなく家業をは風雅とも
好くへしせぬも其日の俳諧にして障るも其夜の俳
諧なりけり五論よりいつわりてゆるのうさを
みわひ侘ける契をとゝろとこそ文好まむといひしめと
高く論されハ忘すまらくのもしまして俳諧におひて
をとや月更てハ十市の里の哀にも通ふらんと丁東
舎と書てよくぬ只其宿の家にこもりいとまも
浪の音きくわ添て長く風雅の宿かもあわれとや

如是菴撰詞

かりそめの旅とて立別れしかけるゝも遠きあふさゝの
去となりし南室坊が魂に告むかし祖翁ハ浪華の露
と消え嵐雪ハ鎌倉の月に身を終ふかかり俳諧
行脚の涸するまくのとしと志れハ如是菴何とかふ
こむ何を敬るへきさハくく齢ハ一ゝの冬越して交り
我が年月もへし偕ぞ哀れなるかな世度ハ不之菴に
ゆくれ今ぞ此僕を傖者の身のいつれか人の上まで
をも聞なるらむ

何ふゆひもなし鵞鶯の雪信

与有功子書

我として其悪きを知り悔て其よきを志れども人をは
言を捨さるも聞かり彼に慚る営も夜あるぬハなし

島の春も日よ偏くはよりと世よゆかせの眼にそなる
をしまれそもや家者ども時君をきふを一度りて
肝瞻をうふ君はりりわ和漢の才よ富て詩をふ
府下よゆる且俳諧よ好て人業係の情をえる敏
口を宗ふ玉を吐爲をしれは綿を繰るあう新の
筆よはあふを思ふよいうる夙縁よや君らいふを我ら
ゆよ遠ふを我ら云を君るけふわうれ老の月の容
をてふを續はかあるとも何らせむ我ら俳諧の好
悪をてふをる君をまうをの続とせむよ五十余年の非
をもうくをかや老後の力を得るりつを君ら
俳諧をるるより露川ら蕉よ出ふをりをへ
其藍の藍なるをりて其色を慕ふかを

濃きをりは稿深出せるものやこのころひをる論をあ
文操十論の上よ初て誠よ我多年瞑眩するをろ
陶侯もをりを不思議やをを我ら君ら濃を
ふを一度は驚き一度は憤をて論やむ抑
東彩坊は蕉門の逸物や昔葛の松原より續
五論を著を安情爲實治合の論實よ俳諧の
皆髓を彩を其後東西和話夏長ゆを云物
金言妙語みををを惜をを終正字の紀
を書て文考の名をなるものよ擬してよりすての
咎を蓮二よ謂せて文盜を選して自注ををる
文操を編て真名の新製よ及ふ十論を著て
虚實を論一名よ俳諧の二字を仮れを長ゆ

李如耳よりて酒をすゝめて併書をもて往年の
贊ハ俳諧のさまよ及ぶ毀譽ハ人の常なれ
の君らいふ確論よりて孫子今をもて是を行を
かゝむ志をよ先よいふ我君を待ちせむよハ秋又
清き光をもて只際の係を取て所君分
てゝ心をもて其いふ所他よりよ君蓮二を待を
きけをいまを支考を称をもて儒士ハ教氏
を仿をもて其法のもつてさわれハ僧よりて
身の上の益を佛徒ハ儒をといへ其をの
所よ付ハ所用して今日の法を内法皆の
をゝ沒や支考ハ蕉門の後良や旧法をもて
紹矩をもゝ一の文操十論の法よ和して也移

能諧をもゝ物ゝ君能諧の益をもゝ必
是を法をもゝ我ハ君を和をもゝ君の
悔てをもゝを忘れむハ其損只君よりて君の和をして
悪きを知をもゝハ其損我よりてをもゝ法をむふ
をもゝ歌をもゝよりて何ゝ今書をもゝ志を
いふ多言をもゝ但君をもゝ君をもゝ
君をもゝ我をいふをもゝ川亭や酒日をもゝ厚し訪れむをいつれのをもゝ又
一飲よ相笑ひて二秋の回を解むの多罪をもゝ

春の日の序

蕉公翁生涯の七部集をもて世をわをもゝ中よ文をの日の集ハ

尾張五郎伝兵衛いふ人あり去る暮雨苔の門人騏六
なる者の家より一巻の手伝わりこれを
往昔仲なる軒のわるしの公物を招きて其日まねかれるものを
して其巻の世行分の第一巻まで遠せるやいつれの
集を出すわるもつたえすされハ暮雨苔曉墓子是を
をしこ是を尊ぶて社中をとりして四巻の手伝ハ
つゝね尋尾張五郎伝を結むに稿ありて周をを
進ハ病の尾をりて貂を結ぶわるへき祖翁の
魂りうりさるもまる眼まして貴しうむ人
なるといふへうに實は本州の面部をもいふへし
浄写は臨て予は一語をうへよ結ぶ嗟乎是まる
舊門の盛事や何を口を噤んやと年八明和の五めうり

龍海方に集るけもわりのよ巻ふ冬の日の短き巻さ
めるして所責をふさるてうり

郭公文墨記

郭公の文墨ハ名は地ふ二つ浮の浪は立並をむるは
わるす昔持る文墨ハ世を遠れるれ人ハ世を
りる客をうへて為の茶をへき勇もわるさとハ
不用の物ハうさをまるさめとかしうへはおくれて
るるる程も二十年は近し通り英紙なるをのこ所い
ふて物語る席は世董は物うきハ幸は紙うき
ハ地をするるるりの物一ッ何の不世ふるるわるむ
るるるハ得るるもわれハ公物のるめは造ふせんと

をひてすむへくに思へハ必懐ものを室のにわたち中右に
あれハよろつよくうかれともわろへし長明ハ車に
つミて建つ崩しつてもちるゝ方丈にくるも折
琴琵琶を詠ひるさめしを思ふにわろハさて
ありなむさるまても今の世に此芭の行るゝてや凡
いなき無円雲兵ヶ往まて家に一瓢の二つありきハ
稀なりさるらふ重書ろくの方さるゝす老の身も
こゆきなかり夢にもつかれ幻にも立さそくいと
むつかし只函もうしろさもなき物あつかやとこの
一瓢を新製して草庵の蔵おきなかせるや弟の
後に将のうるハ吉田の法師も悟しかゝとめなむとく
へき程にもあらそよろふぬあまるゝの詩わもわかし且

此名をくよふハわしつらる人あハれてあくへきのこ

一声や二つにかゝふほとゝぎす

白蔵主賛

醫者の若死せしもろ出家の地獄さてあるへし人の口
ろゝの飯粒を祭てむよりまつ秋ヶ鼻毛をぬかるへ
ゑし

異名いふ尾に尾や白蔵主

桜の句小序

松井氏寿菴のうにに千本の桜を植らふや只好人の
興を誘ふのくにわらそみのつから精舎にまうて仏縁に

むさぶるめむすまあり剪写方よ梅の句を清集て永く
宝蔵よるめむるを其志うるよ及て予よ小序の需わり
我き後京極拾改殿のるよむう祈うる梅のるを
るてよるのと春のるとたるむ見をるて方世の
後も彩るむ人の枝ようのめるを慕みるとよ野
よハ其人を志るるよハ其人いちるるされハ不朽の
名るるるといふへ我り短才るる他のいるくきるる
るを只中一句を拳て彫るの労の梅の名よ待て
むるるるるるるかるを見るも小序るいるるへ
今枝る梅や世るの春のこ

八橋集序

きるるきめるるの年月まわるきのふハるふのむる男
あるるる春河よ序草るるるるわて風雅よ聴るわまり
け國よ迹るる名るよりて八橋集選んと思いるるる
るのむまるさのるるなるも水行川の泡る消るる
るるるるるるるの捨るるるて二三の門人きるる
つるるるる一都の切るりぬるれハ名るるわて容る
るを必るる協るようける妄ようるるて只四季の
書るるるへて昌るを八ッ見るるるせるや是且選るの洒落
るるるる家ハ其澤よるる名のるるのゆるるまるわる
あるるるせるハ鶴いるるるる集のるるまるをるるる
ものせる言のるるのつまるわれハる小序を清るる老の
まるるること何のるるるるるむる辞るるも辞る得る

すゝめて紙書て得るに聊謝していふまゝなり駟馬の車に
のるすハともあれ雲上のまじハりに貴人の声かゝるに
似たらの順れといふもの行ゑてにハなくてかなふまでして
しわてなくわたる八橋にもなくしさまなくあふさゝ秋
只られさしひあかしのゝ若しと人の情まハ橋守の
ゆるまうせてうつりさゝしむるよしや安かるべし

拾扇說

人の手より得るを賜といひ交易して得るを給るといふ
めしくへハ謝あるの礼あり買ハ價に高下の論あり二ツの
せうをそれて拾ふといふ幸あり伯吉の濱の小貝も
秋の山路の落栗もひろふハ拾ふ物なれハそれハある
べき所にあれハ幸のさまハ及ばす思ひかけさるところに
得るを天のあたへといひて人のうらやむをやされハ
欲に爪長きをのこハ天もあたへぬあきらめとてうらに
猫子をつなぐ牛の糞に手を傷をおさて得らさるなひ
ろし愚人ハ論なき足下を金銀を拾ふハまる幸
の甚しきに似されとそれハ落しゝる人に方かわきて
身上破滅に及ぶもあれハ心ある人ハ其ぬしを尋て戻し
又ハ心のねちけ人ハかくして戻さぬ不埒もあれハ其ぬしの
怨みかひ法諸を拾ふ紀ゆとなり災を拾ふ傍しも
成めへしこのころ知樂舎の主人途に一柄の扇を
拾ひ是人の落しゝる物なれハ其ぬしハさそ腰を
掻て是へといひさるわりまして惜しむも妬し

ゝも思ふへゝを雲よ沢ふかなゝ拾ひあつゝ其西八尾公
仆草庵にもわゝを鯉の龍門は登れゝ西ゝをされハ
世人の門つゝは教学のゝわゝわりて天まも仆まも
行ゝ中は世ゝゝ龍門の吉也分得ゝゝをゝのゝ紀
物ゝて鯉ふを大ゝをゝむへゝりや其知楽舎乃
号ゆゝゝ其行ゝあゝりの吉水川の鯉よりて名つゝ
ゝ謂われハゝゝゝさゝや怪ゝをゝをも恠まされハ
其わゆゝゝ彼ゝゝをよろこひをゝをよろこゝゝ其恠
ゝゝ空ゝゝゝ法ハ雪解て梅候折られハ録てゝゝい得ゝ
鯉ハさゝゝれ百ゝくのゝゝ春の雲

歌八象

五十中六十中七寺の蓮ゝ八象ゝ名のれゝをゝきゝ年の
ゝれされハ百年もいつるわゝや右卦ゝゝゝむゝゝ
中泥田ゝ棒の女性ゝ陳ゝ火性ゝ金性ゝゝハ
わゝゝゝゝゝて年の加ゝも行ゝれを生ゝは
わゝまゝきをなわいさや年を定めむゝ連中いい
合ゝて目利藤をゝゝゝゝさすわ佛のゝゝ先生を
すゝて各入れをするゝ其ゝゝ年の古いゆゝ一所せん
ゝ名をゆめてゝゝ年を生れ年ゝゝ六十一象な卦の
ゝゝりゝゝの丑ゝゝゝ見ゝゝてゆゝゝゆゝと
皆わゝめゝハこのゝゝ年忘の宮中ゝ見されゝ年を
定ゝも定めゝ世の中中紀金ゝ学ゝゝ人の
ゝゝゝゝきゝれぬ生れ年ゝふ定ゝも又時音菴

三彩集序

信濃なる浅間山嶽は名にしふ富士の煙にして四時の雪
をいただきて名の名所なるに音聞くも卯月のわかなに
吹ちらされ淀の呂なりの郭公も声ばかりまれなる須磨
更科の月にいとゞ山ふかくなれてわかの浦はよめるに
たゞなるなかなるなるよはなきに雪をまねびてこゝを海
雪の名所といふべくそれさへ旅人の目をよろこ
ばしめ所を惜みて此國の
漁間の煙まがふに立ぬ所を惜みて此國の
好事の三士集ひて雪の桃をむしりて集を編み
彩毫を三彩にいはれしは古今集に三鳥の侍
わりてそれは安うぬるのようへ又こゝに三彩の
侍わりてもけ撰者三人の各羽の字をいたゞきて

鳥羽遺中之内

いまゝ其羽はいつれのをもをもいとやはらかなるを
をるよりはるかに異國のこゝろをこゝに我朝にもをしへて
季をわかるものはむつかしわかるのをいかにも
不自由なりさはふるよりぬ常住の物ゆゑにあるを雀の
羽は仙人にをくれて寂しくまして寄乃
むつかなる鶯は山おろしに鳴は不信なる雀を
いとゝ只月にはわてをもすいも寢を雪の寒
きにも朝起なる鶏の羽をもて御借なる信をくきゆゑわり
をわくゆゑにけ羽は此をる定りぬさてこそをる羽玉の
ひろさにけ集も世にはかゝなるむ見世こそるの
侍なるて秋をゝ幸にきゝと得るこゝろ乃
こそるはわれのをきりてをゝ花をろくをくめら

[illegible]れハ此序ハ是ハ[illegible]して撰ぶのもの[illegible]
[illegible]と[illegible]ふ

笠の次ぬ序

東相ハ[illegible]師ハ[illegible]付ハ[illegible]わ[illegible]うし好む所も同[illegible]
[illegible]して只其心の[illegible]
[illegible]の[illegible]海を隔れハ[illegible]ハ洪喬ハ不[illegible]
[illegible]の[illegible]の稀なる言も[illegible]ハ老を[illegible]
友なく一ハ後初ハ[illegible]
胡蝶[illegible]

なりて[illegible]
立[illegible]を秋[illegible]
夢[illegible]や秋[illegible]
[illegible]師の消息[illegible]
[illegible]ハこと書中ハ[illegible]師曽て掛湯の[illegible]
或ハ其地ハ問訊の句[illegible]を輯て笠の次ぬ[illegible]一集
梓行の志あり予ハ其小序を[illegible]
問て[illegible]其集の玉な[illegible]
[illegible]ハ其地ハ文人の輻湊[illegible]東部[illegible]近
金[illegible]の序文ハ得[illegible]も易[illegible]
[illegible]邑の老拙ハ[illegible]
[illegible]の鞍馬ハ便して[illegible]を求[illegible]

不才のわれらを以て辞せむ事を彼の思ひ合す
夢わり天已に是分定め物已に成りて遂に[illegible]を
論ずること只世物を述て其中あり仏の[illegible]
まく其輝のうるはしき笠の次をもて驥尾につき
千里を遠さむ李漢韓文を序ずして世に
ちらしめ[illegible]似ずして厚彰を筆して
翰を学ずるもの

法樂俳諧序

図説むかし[illegible]法師をつくり百幽の八九の[illegible]像を
きさみて殊さらに今も世にちりかひてさだめ永
考原の家に求得ることなくつきもてけり

[illegible]通日黒田氏釜月子のもとの一幽仏
求出とり黒田氏言て城南[illegible]津の里に別荘
あり此地に名をあふ富士の高根をこの内の
ちつるに望めはかりて富士を屋[illegible]いつくり
答月子の慶父[illegible]宮延の比の韓彦の翁に
きこしめる時異客のもに清ひて第一樓の
字ばかりをしめ初世別荘の号をこの世樓の内に
富士はさらにや其余冬門の徒投信別の清ン嶽
的の嶽士て皆一ちの内に南に指ばかりを
塾田野海深ちすて當国のこの松なるもの
十ちて七八を計ふ寿に齊下の第一樓なる
されはかの聖像をこの安置しあるくれの

富士よむらはめるを汚高津の雲よりの果
りもふくひこよてくさむとや志るるよりへつるよ
俗語の連歌よりなひて和歌ハ專とせしを俳
諧ハ連歌より出連歌ハ和歌の流れよりて
皆俗仲の風雅なれハ技をわれられ根を
ゆるし物の本の行を白眼しもむやといい戸
一奏の俗語をつくりて法楽に供ふんとす
連衆已に定りて三吟老こるをいて小序の求
わり薄芳のおくさるを斷て辞せんとするに
まるゆめくハ寄る世の諺に主役ハいの美役
らくるを見を分しく働くわさハ美役の法より
りて居なくなるを業ハ多く老年の温役と

鳥賣

なるわりハやや一巻に頭ゆめくるわらはなる
なる歳ハ吾ら右に出るる人なくよりや髮髮を後て
ちらとなるくと競むハいくく病蓄の忘れる
叶くく眼鏡に志くく苔を〻むハ郷きよりハ
くれハ易うわめくく鄙陋ハこつく年に許て
こちくくハ口の序をなんぬ

合藍撰この年序

今年宝暦甲申の五月晦日赤蕪合藍身まりぬ
四方各追悼の句を紙に惜く郷くもむく有る
年ハ俗語亭に風雅ハ言ハ其志百ゆくり
文會必世人を〻を三ともまく郷くに序を

佐なりと白われいとまる支吾を定めがたきれハこまる
敲推を論せ〳〵へ〳〵更ゝ往しかハ思ハ老侯ハ
白鬚ハ〳〵なりと頭撓訒を汎て曰
句中所謂蒻子者生蕨所嗜勸酒必爲下物且
石榴一株嘗與予今猶存庭畔
其齡なかりしを　此ふるなんをはるむ図
面影ハ〳〵ハ　嘆の月花よりのこり　残利
音信ハまてハ　夕の点墨〳〵ぬ　断奴
恋ふ像を添ふ仏つきあめ　下来
ゆめ覚を喫ふ未〳〵　来須
子向の蒻子　酒むかし〳〵あり　在
記念の石榴　露ハのつ〳〵ふ　濡

仏なりやさて
恋むく〳〵ハ
雑歌やうゝ　ゝるのかを夢もなハ　無

巴崔末四ゝ三吟十二表長紙の奥書
我ゝ祖父野双翁其世ゝ季伶老人の門ゝ学ひて
吟老人及ひ湖春〳〵両伶ゝ三伶の二百韻ゝ〳〵めて
家ゝあわさ〳〵ハ延享八年野双翁四十四歳
ゝ七十年の後昊ゝ〳〵ゝるゝ其ゝ〳〵むゝ一ゝ〳〵
風雅ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ我又此ゝ〳〵ゝ遊ふ
ゝ〳〵ゝ當時尾城の両宗匠ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ虔て
一巻の三吟ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ嘆呼又七十年の後ゝ至ハ

今のつゝみ葉刀しやなつむさゝハ今の葉刀のひゝり
わゝまりて雪気の斗かゝるきもいらゝゝくゝ
らそゝれハ子孫の古きを慕ゝ是を風雅乃愛
遷ゆしわゝちゝせて青檀の庭を納めゝゝる
なゝむ

宮延二年庚午ゝまちり宮隠里形ゝゝゝ十九齢
の秋八月初雨亭ゝる芭ゝゝ

5